

海猫02

西暦20XX年、ついに第二次関東大震災が発生。被害は予想を上回る規模で広がり、首都圏は破壊され、都市機能は完全に麻痺状態となった。

東京住民の半数近くが地方へ一時疎開する中、凶悪犯罪、破壊活動、私兵集団の跋扈等、治安の悪化が進行。事態を深刻に受けとめた政府は突如、治安担当行政機関、『特務庁』の新設を発表、非常令を宣言した。

一般警察以上の権限が与えられた特務庁の実働部隊、治安局は、やがて、諜報活動や実力行使が広く認められ、強大な権力を有した軍事秘密警察組織へと変貌を遂げていき、犯罪のみならず自由な市民の権利をも封殺していくに至ったのだった。

人々は彼らをその標章から『海猫』と呼び反発したが、いつしかその声も弾圧と監視の目を恐れて、沈黙を余儀なくされていったのである。……

身体測定の季節

公園に横付けする形で、宅急便会社の輸送車が駐車していた。

ここは新興の大団地群なので、その種の車両は珍しくなく、誰も気に留める様子はない。幼児の手を引いた母親たちも、散歩中に一休みして鳩に餌をやっている老夫婦も、みんな心地よい初夏の日差しの午後を楽しみ、満喫している。

けれども彼らの一人でも、注意深くそのトラックを観察すれば何だか不審な点があるのに首をかしげざるをえないだろう。たとえば屋根の上にある、カモメをかたどったこの会社のロゴが、時折、僅かずつだが回転しているのは、どう考えたっておかしい。まるで怪電波を傍受しようとしているレーダーか、外の様子を探っている潜望鏡のようではないか。そして、もう少し勘のいい観察者ならば、そのカモメのデコイの目が、ほぼ一ヶ所に集中していることに気付くであろう。それはすぐ道を挟んだ向こうに建っている十数階建ての団地の、ある階の、ある一室を狙っているに違いなかった。

トラックの中では――

「クソッ、今日はまたヤケに遅いっスねえ」

まさに潜望鏡とっていい、スコープを覗きながら吉崎が言った。彼は宅急便会社のユニホームを着ていたが、どこか不釣り合いな面構えと体付きをしている。

「フン、おおかたサークル活動で時間を食ってんだろうさ」

今日発売された少年漫画を読み耽っている御坊は、そ

れから目を離さずに答えた。彼もまた同じ服装だった。

「またあの辛気くさい老人ホームで人形劇かあ。何が面白いんでしょうねえ」

吉崎はスコープを右に左に操作して様子を窺っている。

「おい、吉崎。不謹慎なことを言うんじゃないよ。田野倉エリちゃんは尊い志をもって奉仕活動に汗を流しているんだから。——二年生の若い身空で、まだまだ遊びたい盛りに、あえて自己犠牲の労働を己れに課している崇高な彼女をだな、そんじょそこらのスベタと一緒にするんじゃないありませんよ」

「またあ、先輩、心にもないことを言っちゃって。汗流してるんならいいけど、部長の男子生徒と股おっぴろげてマン汁垂らしてたら、ただじゃおきませんよ、僕は」

「やだね、下品だね、とても海猫のエリート部員とは思えないね！」

御坊は漫画を閉じて分厚いそれで吉崎のパンチパーマの頭をポカリと叩いた。立ち上がって大きくノビを、あくびをしている御坊の頭は角刈りだ。二人とも武道で鍛えあげられた頑健な肉体をしていた。

「ったく——」吉崎は不平タラタラの表情だった。

「治安局女子教育課のどこがエリートなんスか？ 第四課なんて、今頃、コマンドとドンパチ楽しくやってるは

ずですよ。それに引き替え、こっちはひねもすお尻の青い女子校生の張りこみ。退屈なんだなあ」

コマンドとは秘密警察『海猫』の打倒をめざす非合法武闘組織の通称だ。若い局員が派手な任務に憧れるのは仕方のない話である。第四課がその殲滅作戦の最前線に立つ花形とすれば、女子教育課はその名の示すとおり、女子供相手の管理監督係りといったところ。どうしたって影が薄い。

「そうだなあ、お前、ここに配属された途端に退屈な張りこみばかり当っちゃったものなあ。いくら田野倉エリが、コマンドの一員である田野倉マリの妹だって言たって、第四課のスリルに比べれば、眠くなるよな」

上官の御坊は苦笑しながら不憫な部下を見やった。

「ま、それはいいスけどね。問題は我々が無駄足をしてるんじゃないか、っちゅうことですよ。田野倉マリと云えば、某女子大で幹部やってるコマンドのバリバリの兵隊でしょう。そんなのがうかつに実の妹に連絡とったりするでしょうかね。しないと思うなあ。僕は」

どうやらこいつは五月病だな、と御坊は思った。新人によくあるパターンである。刺戟を求めて海猫に入隊したが、夢と現実の違いに失望が鬱積してきているのだろう。

(こりゃ、少しアメをしゃぶらせてやらにゃ、いかんかもな)

新人教育も大事な上官の役目である。押さえているばかりでは最近の若者はついてこないのだ。

「フッフ。吉崎、女子教育課だってそう捨てたもんじゃないんだぞ。よし、今日はひとつ、我が課の奥の手を見せてやろうじゃないの」

「奥の手……と言いますと？」

スコープから顔をあげた吉崎が不審そうな表情になる。

「いいからいいから。しっかり田野倉エリを張りなさい。俺はちょっと準備をしておこう」

御坊はパソコンだの盗聴用のオープンリールテープレコーダーだの、そういった精密機器がぎっしり埋まったこのトラック内部の隅に行き行ってゴソゴソとなにやら始め出した。吉崎は上官の意図がわからず首を捻っていたが、再びスコープに取りついた。

五分後、吉崎が田野倉エリの帰宅を告げた。

「どれ、モニターに出せ」

御坊の命令どおり、モニター画面に映像が映しだされる。一人の若い娘がバス停からアパートへ向って闊歩していた。洗い晒しのジーンズにクロの半袖のTシャツだ。そのジーンズのポケットに両手を差し入れ、若々しい足取り。肩までよくのびた黒髪が風になびいている。スラリとした身長をもち、スレンダーなプロポーション。モデルの印象といってもいいだろう。とても十八歳

とは思えない身体をしている。胸のふくらみだってかなりのものだ。ジーンズをパンパンに張りつめさせているお尻の形も悪くない。昨今の日本の女子の体位は西洋人のそれにほとんど凌駕しているのだ。

一筋の黒髪が瓜実顔を横切っている。美人だ。濃い眉、大きな瞳、口もやや大きめ、鼻はツンと高い。抜けるように白い、化粧っ気のない肌がなければ、ハーフと見間違えそうである。大人びた顔。利発な性格がそこにじゅうぶんに現れている。

「相変わらず、生意気そうな面しやがってからに」と吉崎。

可愛さ余って憎さ百倍、こんなに魅力的な娘がよりによって自分たちに牙を向けるコマンドを姉にもち、そして思想調査の結果、ほぼ百パーセントの確率で、この妹も過激な道に追随するといふのだから、憧れのエリちゃんは同時に芽のうちに摘み取っておくべき危険な花なのだった。

「ホント。これが十八歳なんてとても信じられないわな」御坊は宅急便会社の帽子をかぶり直した。「あの色気。まず処女とは思えない。女の早熟は社会の敵。原因究明と正しい道への善導こそ海猫、女子教育課の大切な任務である」

「いいんですか。泳がせておいて姉を捕まえるんじゃないんですか」

そう言う吉崎も御坊にならってさっさと帽子をつけている。なんだかわからないが、面白そうだ。こんな箱の中で一日中くすぶっているよりはマシだろう。

モニター画面の田野倉エリは小走りに団地の入り口へと消えていった。彼女は姉と二人暮らし。両親はすでに他界している。姉も地下に潜っているから、現在は一人で生活しているのだ。

「これをもて」彼は吉崎に段ボールの箱を手渡した。そして自分もひとつ抱える。

「なんスか？」

「開けてびっくりたまたま箱さ。さ、俺につづけ——」御坊はトラックから下りた。

「待ってくださいよ、先輩」吉崎も慌てて飛び降りる。

二人は女子校生の後を追い、建物へ入っていった。

田野倉エリの部屋は七階のいちばん端。非常階段の横である。いい場所だ。大声を出しても気付かれにくいだろう。もっとも、調べによると彼女の隣の部屋の住人は共働きの子なし夫婦なので昼間はいないし、最近の団地の防音設備は完璧だから、中へ入ってしまえばこっちのものといって良かった。

「ドキドキしますね」吉崎は昂奮気味だ。

「しっ。配送のあんちゃんがニヤニヤしてたら怪しまれるだろうが」

「だって、あのエリの部屋に入れるんだから。ククク」

（入るだけじゃないぞ、吉崎。いいもん、見せてやっからな。股間をギュッと締めとけよ）御坊はまだ口元をだらしなくしている吉崎のケツを抓ってあごをしゃくった。

『田野倉』の表札のかかったドアの前まで来ると、吉崎はしかつめ顔に戻り、チャイムを押した。一度では、我らのアイドルは反応を示さず、二度三度と押しつづける。ようやくインターホンから声が聴こえた。

「どなた？」

——生とは思えない沈んだ、暗い感じのする声だ。はなから疑っている警戒一色の声音である。さすがにコマンドの姉をもつ十八歳。来訪者には神経を尖らせているのだろう。

「こんにちは。宅急便です」こちらは海猫の局員とはかけはなれた軽薄な高いトーン。「お届け物をおもちしました」

「はあ……」警戒感がやや薄れたのか、エリは玄関に駆けだそうとする気配。しかし……。 「どこからの荷物でしょうか？」

なるほどそこまで確認しておけば确实だろう。吉崎は表情にチッと舌打ちの色を浮かべて、御坊に助けを求めた。御坊はさっと吉崎に代わり、名演技を披露する。

「えーと、ちょっとお待ちください——あ、そうそう神奈川の佐藤静江様から田野倉エリ様へ、ということですが」

佐藤静江とは田野倉姉妹の遠縁の筋にあたる人物で、交流は少ないが、贈り物があってもおかしくない。そのへんは抜かりのない御坊である。

「ちょっとお待ちください」

エリはすっかり信頼したらしく、扉に足音を近付けてくる。

いよいよだ、期待に胸をふくらませた吉崎の顔。御坊も、新人とはまた違った昂揚感を覚える。こんな、腹の底がスーッとするような気分こそ海猫局員の醍醐味に違いない。

チェーンロックが外される。鍵が回され、扉が少し開いた。中からあの美xxのキリリとした顔が覗いた。黒髪が一筋、ハラリと垂れ落ちた。

まず吉崎が身体を狭い隙間から滑りこませるように玄関に侵入する。そして御坊もつづいて上がりこみ、素早く扉を閉めた。鍵までかけおろす。

エリは驚愕に一瞬、声もでなかったが、頭の回転の早さを見せ付けた。すぐに事態を飲みこんだらしい。

「誰なのっ？」 厳しい声で訊ねたが、二人の男の正体はもうわかっている。

「なかなかいい部屋じゃないか」

吉崎は土足のまま、エリを押し退けるように部屋に上がりこみ、無遠慮な視線をうろつかせる。

「海猫ね。令状はあるの？」

大男の闖入にも取り乱さずに、エリは腕組みをして気丈な態度だ。

「まあ、そう突っ張るなって」

御坊も土足。彼女の背後から背中をどんと突いて部屋の奥へと追い立てていく。

「——ここは私の部屋よ。令状がないのならすぐに出て行って。そうしなければ大声、出すわ」

「私の部屋？ お嬢さん、嘘を言ってはいけませんよ。正確にはあなたとお姉さんの部屋だ。民衆の敵、コマンドのお姉さんのね」

「……」エリの顔には脂汗が浮いている。顔色も蒼い。やはり——生なのだ。

「それに言葉遣いがありませんよ。目上の人間に対しては敬語を使わなくては。学校で習っているでしょう」

「あなたたち、何をしにきたの。姉に用ならいませんですよ。この一ヵ月不在だから。どこにいるかも知らないわ」

「お前、体臭が濃いな」

突如、吉崎がエリの肩や背中に鼻を近付けてクンクンとやりだした。

「えっ？」

「え、じゃない。濃いんだよ、体臭が。香水つけたほうがいいぞ。とくにこれから夏にかけてはよ」

吉崎はそればかりか、図々しく女子校生の半袖から伸びているほっそりとした二の腕を掴むと、やおら上にもちあげた。そしてやや汗ばんでいる腋の下の臭いを嗅ごうとする。

「やめてっ。痴漢！」

エリは嫌悪を剥き出しにした表情で腕を振りほどき、黒い眉を吊り上げる。

「キミキミ、やめたまえ。お嬢さんは生理が終わったばかりだから、ホルモンがドクドクと沸きだしているんだよ。体臭が濃くなるのも当然じゃないか」

御坊の言葉にエリはハッとした顔だ。なぜそれを知っているのだろう。たしかに二三日前、彼女の生理は終わったばかりである。

「驚くには及ばない。エリ君のことなら何でも知っているんだ」

と、御坊は部屋のなかに小さなバックを見付けると、さっと奪いとった。

「やめてっ」エリは叫び、取り替えそうと手を伸ばしたが、吉崎が遮った。

バッグの中身を御坊はテーブルの上に巻き散らす。そして生理用具を摘み出した。

「ほらね。あと二三枚しか残っていない。いつもより、今月は少し長めだったようだね。本来ならもっと多めに残るはずなのに」

ヘラヘラ笑う中年男はナプキンをエリの目の前でヒラつかせる。エリは驚きのあまり声もでなかった。

「バーカ。なんて顔してやがる。俺たち治安局女子教育課にかかればな、なんでもお見通しなんだよ」

吉崎はエリの黒髪を跳ねあげて、露出した可愛らしい耳に言うのである。

「税金で痴漢を養っているんだから、世も末だわ」

エリはふと我にかえり、冷笑を浮かべた。驚いてはいるが怖じ気づいてはいないのだ。見上げた十八歳である。

「ケッ、そのへらず口も、牝犬の姉から教えられたのか」

吉崎はカッときてエリの肩先をド突いた。

「姉は牝犬じゃないわよ。犬はそっちの方でしょう」

「なんだとオ、てめえ！」吉崎はエリの胸ぐらを掴み、グラグラと揺さ振った。

「まあまあまあ」と、御坊は血気盛んな若手局員を制した。そしてエリに向って、「とにかくあなたにはいろいろと聞くことがあるし、裸にもなってもらわないといけないから、まず寝室へ行きましょう」

「……裸って……どうということよ」

エリは目を剥いて頭ひとつ大きい御坊を睨みつける。

「いいから、さ、こっちだろ、寝室は」

二人の大男は彼女を左右から挟みつけるように腕を取り、力付くで連行しようとした。

「いやっ、何をするのよ！」

エリは腰を引き、足を踏張って連れていかれまいとするが、何しろ彼らの腕力はゴリラ並みだ。ズルズルと引きずられていく。二DKの間取りだから寝室がもうひとつあるのだ。都合のいいことに窓がなく、さらに珍しくベッドではない畳の部屋で、広々としたスペースの六畳間だった。

その畳の上にエリは突き飛ばされた。さっそく吉崎は整理ダンスを物色しはじめる。女子校生の衣類が掻き回されていく。

「これは全部、お前のものだろ。姉のマリの物はどこだ？」

「かってにそんなことをして、赦されると思ってるの？」

エリは起き上がり、怒りを必死に沈めながら抗議する。

「先輩、やっぱりこれは計画的な地下潜行ですよ。身の回りの物をすべてもって出ている」エリの抗議など無視して報告する吉崎。

「てことはだ。あなたが姉さんの出ていった事情につ

いて知らぬはずはないということだね。なぜって、ひとつ屋根の下に住んでいる同居人が突然荷造りを始めれば、誰だって気付くし、不審に思うじゃないか。当然、どうしたのかと訊ねることになるよね」

「知らないわ。何も。朝、起きたら姉はどこかに行っ
て、いなかったんだから」

「どうしてもしらばっくれるつもりかね」御坊は彼女の傍らにしゃがみこんでジロジロと身体へ嫌な視線を這わせる。「ま、とにかく着ているものを脱いで真っ裸になっ
てもらおうか。この衣類が本当に君の物であるかどうか立証するために、君の身体のサイズを測定しなくちゃならないんでね」

「馬鹿馬鹿しい」エリは吐き捨てた。そんな勝手な話
があっ
ていいわけがあるまい。

「おうおう、――生のくせにいやらしいパンティ、も
っとるなあ、お前は」

吉崎の探索はタンスの下段へと移り、ランジェリー類
を至福の表情で両手に抱えていた。エリはもう呆れ返っ
て言葉を出すのも徒労だと、不貞腐れてそっぽを向いて
しまう。

「そのピンク色のショーツをよこせ」と御坊。手渡さ
れたそれを目一杯広げてエリの眼前に見せ付ける。「こ
んなの校則違反じゃないのか。それともこれは姉さんの
か。ん？」

「私のだわ。うちのーは下着の規制はないから、校則違反でもないわ」

「チッ、今時、そんな甘いーがあっていいものか。嘆かわしい」

御坊は、尻の丸みが薄らとついているその裏側の匂いを嗅ぐ。甘酸っぱい女子校生の桃尻の芳香が漂っているようだ。

「先輩。ブラジャーのサイズが二種類ありますね」

と、吉崎は両手で十本ほどのブラジャーをぶら下げて言った。事務的な口調を装っているものの、相好がどうしても弛んでくるところがまだまだ若いといわねばならない。

「ほう、二種類か」

「ええ、こっちがAカップ、こっちがBカップ。たぶんBが姉の方で、この娘がAでしょう」吉崎はエリに見せ付けるように艶美なブラジャーの束をかがげている。

「いかんよ、キミ。そういう予断に基づいた操作は」御坊がたしなめた。

「は？ と申しますと」

「つまり年上の乳房（にゅうぼう）が、より発育しているであろうってのは、単なる一般論にすぎないんだよ。女子校生よりペチャパイの女子大生など、刷いて捨てるほどいるじゃないか。それに世の中には着痩せということもあるし、フェミニズムにかぶれている女たちに

は自分の乳房を小さく見せようとして、ブラジャーでギュウギュウ締め付けているような不届き者も多いんだから」と、御坊は視線は部下の方へ向けたまま、無造作に手を伸ばしてエリの胸をむんずとわし掴んだ。

「……？」

それがあまりに唐突だったため、エリはただゴリラのような手にTシャツごと握り締められ、いびつに歪まされでいる自分の乳ぶさを見下ろしながら、悲鳴も抗いも忘れてしまっている。

「つまり私が言いたいのはだね」御坊はつづける。隣の乳ぶさへ握り替えさえして。「捜査は一つひとつ疑惑を丹念に解消しなくちゃいかなのだよ。どんなに手間がかかろうともだ。この場合は、むろんこの娘の乳房のサイズをきちんと計測したうえで初めて何かを言える、と、そうなるわけだよ」

「いい加減にして！」

エリはそう叫び、厚顔にもまだ握り締め、今や指を食いこませつつモミモミ卑猥な運動を開始させている海猫局員の手を振り払おうとした。しかし、よほど心地いいのか、このオジンは娘の抵抗を避けながら、今度は両手で双乳を掴むのだ。

「馬鹿っ」エリは彫りの深い美貌を真っ赤にして激しく藻掻きだす。

上へ下へ、右に左に、御坊はからかうように乳ぶさを

捏ね繰りまわした。可哀相にエリのTシャツはジーンズの裾からまくれあがって、愛らしい臍を窪ませた白い下腹が露出している。彼女がいくら抵抗をしても大男の力の前にはどうしようもないのだ。

「畜生っ、変態！」白い歯並びをイーッと剥き出すようにエリは汗ばんだ顔を暴虐者へ向けて罵る。その顔に御坊は強烈な平手打ちを食らわした。エリは人形のようにコロコロと畳に転がった。

「よし、そこまでだ」

何がそこまでのなのかわからないが、御坊はそう言った。上官の意外な行動に啞然とするやら陶然とするやら、ボォーッとブラジャーをぶら下げたまま突っ立っていた吉崎は肩を叩かれてハッとする。

「段ボールを持ってきてくれ」

「あ、ハイハイ……」吉崎は二個の段ボールを重ねて運んできた。

御坊はそのひとつを開けると、中から長くて太いロープを取り出した。それをグリグリとしごきながら、突っ伏して頬を押さえているエリの背中へ足を乗せる。

「さ、身体測定の間だ。また殴られたくなかったら素直に言うことを聞くんだな」

そうして、エリの細首にロープをぐるりと巻き付けるのである。

「うう……」締め付けるというまではいかないが、太

くて固い節くれだったロープが喉にあたり、エリは軽く仰け反って呻いた。叩かれた頬っぺが赫く腫れている。

御坊は首に巻いたロープを輪に結んで、首輪状態にした。あごから抜けはしないが、縄尻を強く引いてもそれ以上直径が狭まらないので、窒息させる気遣いはいらない。

「怖い顔をするな。そのままブスになるぞ。諦めてヌードになれ」

女子校生の頭をコンコンと拳で叩き、御すように黒髪をグシャグシャになるまで撫でまわす。そしてロープを軽く引っ張った。

「あううう……」

これには逆らえなかった。少しでも苦痛を和らげようと、指をロープと首の皮の間に入れようとするが、容赦なく引かれるので咳きこむばかりである。やむをえず、エリは立ち上がった。

「早くしろ。自分で脱がないなら力付くで脱がせるまでだぞ」

そう言う吉崎の手には電子巻き尺が握られている。

濃い眉を吊り上げ、二人を睨みつけるエリ。髪がおどろに乱れている分、野性味が増して、凄絶な魅力が溢れかえっている。とても十八歳には思えない。

キリキリと眦を決していたエリの表情がふと弛んだ。そして口元に嘲笑さえ浮かべた。侮蔑したように二人を

ネメつけると、ふんと鼻先で笑った。

「それほど女子校生のストリップが見たいんだったら、見せてあげるわよ」

威勢よくたんかを切ると、まずジーンズのウエストを締め付けていたベルトを外し始めた。

「いい度胸だ。さすがはコマンドを姉に持つだけある。草葉の陰でご両親も喜んでいらっしゃるだろう」

首縄を手にした御坊は腕組みしてじっと凝視している。吉崎も眼球を血走らせて舌なめずりしている。

エリは二人から目を離さないまま、脱衣していった。それは女としての誇りを保つためであり、彼らの暴虐に対する痛烈な告発のためでもある。だが、彼女のこの行為はまともな人間にしか通用しないやり方と言えた。なぜなら御坊や吉崎のようなサディストは女の活きが良ければ良いほど、抵抗の姿勢が激しければ激しいほど、燃え上がるものなのであり、彼女の毅然とした態度はまさに彼らの好餌なのだった。

いよいよ、Tシャツがたくしあげられた。脱ぎっぷりも男っぽく、さっと首から先に抜き、つづいて両手である。ブラジャーだけの上半身が男たちの眼前に出現した。ゴクリと生唾を飲みこむ吉崎。気性の激しさと似るように、彼女の裸身は澆刺としていた。ロープを巻きつけられた首筋から肩のラインは、どこか少年っぽい。いわゆる女らしい撫で肩ではない。しっかり肩幅がある白

人女のようなタイプだ。しかし肌の美しさは博多人形のようにだった。光沢があり、眩しいくらいなのだ。首の付け根から胸もとへといたる肉の薄いなめらかさときたらどうだろう。そしてゆっくりとふくらんでいく胸乳はハーフカップの純白のブラにきつきつに押しこまれている。若々しい弾力を想起させる丸みは豊かで早熟だ。その裾が心なしか赤い班を浮き上がらせているのは、さきほどの御坊の荒々しいモミの名残であろう。肌が敏感にできているのである。

谷間をくっきりと作ったたわわなバストから、視線を下ろしていくと、贅肉ひとつない腰がキュートにくびれていた。そこからよく発達した腰部はまだジーンズの中である。刺激的なのはチャックを半ばまで下ろしたジーンズのその姿であろう。パンティのふくらみがちらりと覗けているのがたまらない。

御坊がロープを伝わせて、Tシャツを抜き取ると、まだ女子校生のぬくもりが残っているそれを愛しげに握り締めた。

エリは蔑みの視線を飛ばしながら、ジーンズを下ろし始めた。やや前屈みになり、裾に手を差しこみ、するりと臀部から下ろした。ムチムチと熟れた腰部があらわとなった。パンパンに腫れた太腿の付け根をパンティが逆三角形型に覆っている。ムンともりあがったその中央部のセクシーさときたら……。

ジーンズが足元へ落ち、彼女は跨ぐようにそれを脱ぎ去った。その動作につれて、太腿の裏側からふくらはぎにかけてのラインが緊張したり、柔らかく弛んだりする様の曲線美は垂涎の的といえた。

「下着も取れと言うのでしょうか。変態オジサンは」エリは挑戦的に言った。

お前たちにヌードを見せることなど、まったく意に返すものではないと、彼女は主張したいわけなのだろうが、実際は羞恥に震えているのが肋骨が薄く透けている脇腹あたりに鳥肌が立っているのからしてはっきりしている。

それを知りつつ、薄らトボケて、御坊は驚いてみせるのだから悪質だ。

「ほほう、こんなに根性のある女は長い女子教育課生活でも初めてだ。感心したぞ、田野倉エリ。それに免じてさっさと測定してやるから全部脱げ」

彼の言葉に小さな失望の色がエリの表情によぎった。しかし彼らに何の期待も出来ないのはわかりすぎるほどわかっている。心を石にして抑圧に耐えねばならない。全裸を晒す決意を新たにすると、十八歳の女闘士は両手を背中へ回してブラのホックを外した。ただでさえはち切れんばかりの弾力を胸壁に押しつけていたブラジャーは止め金がなくなると、それに負けるように持ちあがった。素晴らしい。その一語に尽きる。垂れるのではな

く、下着を持ちあげるほど、勢いのいいおっぱいなんて、拝むのは何年ぶりだ？ 御坊はロープを握る手のひらにじっとり汗を掻いている。

ストラップが肩を滑って二の腕にハラリと落ちた。反対側もハラリ……。一秒間の逡巡があったのは仕方のないところだろう。ゴリラ男たちに素肌を晒さねばならぬ悔しさは電子巻き尺でも測れないほど深いに決まっている。それでも一秒だ。長くはない。

乳ぶさを収納していたカップが剥がされた。

プルン——誇張ではなく、まさに若々しいこぼれ具合であった。真っ白な双乳が彼女の細腕の合間から現れた。こぶりだが洋梨型に形は決まっている。アンダーバストが小さいのだが、トップがツンと高いので、男にとってはいつまでも握り締めていたい格好なのだ。小さめの乳輪は見事なピンク色で尖った先っぽも同じ色合をしていた。

出してしまえばふんざりがついたらしく、エリは隠すどころかかえって胸を突き出すように張るのである。

「ほら、パンティも取るんだよ」

御坊は網膜がチカチカするほどの裸身に見惚れながらも職務を忘れない。さすがは女子教育課の又シと言われる人間だが、そこへいくと吉崎はまるで駄目。腑抜けの顔をして女子校生に魂を奪われている。

エリは大きな瞳をいったん閉じて、深く息を吸いこん

だ。胸が起伏し、下腹がふくらんだ。脳天から噴火しそうな屈辱と羞恥をそうして押さえると、パンティのゴムに指をかけた。そしてものの見事に、一気にそれをさげ下ろした。男たちが呆気にとられている間にパンティは桃色の踵から抜き取られた。

ついにビーナスの裸像は完成された。エリは恥部を隠そうともせず、立ち尽くしている。さすがに男たちの顔は睨めず、視線を虚空に飛ばして唇を結んでいる。

畑のような恥毛が股間を覆っていた。逆三角形型の美しい黒毛である。濃くはない。ここだけは十八歳らしい可憐さをもっていた。それでも▽の中央へ行くほど密茂となり、ヴィーナスの丘の頂点付近で最も叢りを強めている。跨ぐらの奥へと消えていくにつれ、細くなるが、美しい秘裂はちゃんと覗いていた。媚肉の発達は標準程度か。色、構造はもっと吟味しなければわからない。

股間の幼さに比べて、双臀の早熟ぶりは乳ぶさに匹敵、いや凌ぐほどだ。丸々と肉がつき、キュンと吊り上がっている。まさに桃尻であり、スパンキングの愛好者でなくとも、一発平手打ちしてやりたい衝動をくすぐられる。きっと心地よい音を響かせるに違いない。

「えーと、それじゃまず、身長と体重からいくかな」

御坊は完全に金縛り状態になっている吉崎の肩を叩いた。

「へ？」

「だから、ほら、測るんだよ」

娘に見下されるぞと、目配りしながら吉崎の持っている電子巻き尺を指差した。

「……そ、そうそう、僕がやるんですよね」

やっと正気を取り戻した吉崎はエリに歩み寄った。電子巻き尺といってもさほど通常と違うわけではない。するすると尺を伸ばしていき、測定物に当てるのだ。ただ、数値の読取りは機械が勝手にやってくれ、デジタル表示されるだけである。吉崎はその端を慚然として入るエリの頭頂部にぴたりと押しつける。そこから尺を伸ばし、顔から胸へと垂らし、爪先に落とした。

「あごを引いて、背筋をしゃんとさせるんだよ」

エリの香水のような素肌の匂いを鼻腔いっぱいに吸いこみながら吉崎は命令する。

「166.8センチ」液晶パネルに青白く浮かんだ文字を読み上げる。「さて、体重だが、どうやって測るかな」

「面倒だ。キミが抱っこして推測しなさい」と御坊。本当は自分でしたいのだが、この捜査は新人へのプレゼントなのである。

「そうしましょう」吉崎はニタつくと、何を思ったのか、宅急便会社のユニホームを脱ぎはじめ、上半身素っ裸になった。「こうしないと正確なところはわからんからなあ」

まさに筋肉の塊の上半身。彼の厚い胸板には剛毛と呼んでいい胸毛が密生して、腹へ、そしてさらにその下へとつついているのである。

「……なんで抱かれなきゃいけないのよ……体重なら五十一キロだわ……」

男性的な野性味に圧倒されて、エリの顔から血の気が失せた。

「自己申告は受け付けない規則になっておる。すべてこちら側で測定しなければ意味がないのだ」

御坊は冷酷に言い渡し、首縄のロープをたぐり寄せた。

処女非処女検査

「いやっ」エリは身体をねじって逃げようとしたが、ロープを引かれてしまえば、たたらを踏むように引き寄せられ、剥き出しの白い肩を御坊にどんと突かれた。

「あっ」エリはその反動で吉崎の胸のなかへ飛びこんでしまう形となる。胸毛に顔面が埋まった。

十八歳の裸身を吉崎は太い腕でしっかりと抱き締めた。エリはあまりのおぞましさ悲鳴を発したが、吉崎はあまりの心地よさに声もでなかった。何しろあの双つの美乳が直接肌に触れているのである。ぷっくりぷっく

りした感触はちょうど肋骨の下のところにあり、時折、乳首もツンツンと刺戟してくる。

「なかなか骨太の身体だ。ずっしりときそうだぜ」

「離しなさいっ、離しなさいったら。いやン」

もう顔面を真っ赤にさせて、エリは両手を突っ張り、必死に逃げようとする。だが男の腕力は彼女をからかうようにズンズンと胸に押しつけるのである。エリの秀麗な鼻も柔らかい朱唇もひしゃげるほど、吉崎の胸板に密着し声も出せない。

強制的とはいえ美xxにキスをさせているのだから吉崎は天にも昇る気持ちだ。双乳乳頭、美貌の全面——それらが己れの肌に擦り付けられているのである。

「あんまり汗を掻かせないうちに、抱っこしなさい。誤差が出るからな」

御坊はすでにたおやかなミルク色の背中に光り始めている苦渋と羞恥の生汗を見やりながら言った。彼はロープの縄尻とともに、エリの脱ぎ捨てたパンティを握っている。

「なるほどじっとり汗ばんできましたよ。やっぱ、生理の後だから体臭が濃いつてのは本当のようだな」

吉崎の手が蕁麻疹すら見せはじめているエリの背中を撫で回し、ゆっくりと下がっていった。

なんとか顔を振りたて、彼の胸から顔面を横向きにすることに成功したエリはアップアップしながらも激しく

悲鳴をあげた。彼女の顔には頭髪が乱れかかり、あるいは擦れて抜けた吉崎の胸毛が貼りついていて、知的で野性的な美貌も赫らに染まり、それはそれでエロチックな風情である。

「いやだったら！ やめてエ」

吉崎の両手がたっぷりと双臀をわし掴むと、エリは火のついたように叫んだ。

「ここがいちばん重そうじゃねえかよ」

ブリブリの弾力を楽しむように掴みにじる。汗はそこにも噴き出していてピタピタ水っぽい音をたてた。最初は片手でそうしていたが、たまらなくなってきた両手総動員で形が歪むほどわしづかむ。

いきなり、エリは吉崎の足を踏みつけた。しかし女の素足では彼の革靴を通してダメージを与えるには不十分すぎた。吉崎は蚊に刺された程度にしか感じなかった。

「フフフ、悪いあんよだ」

そう嗤うと、尻肉を抓りあげ、その手を内腿へおろし、抱えるように持ちあげはじめた。

「あっ、あっ……」

片足を大きく跳ねあげる格好。もっと言えば膝を突き上げる蛙脚にエリの下肢は抱えられる。

「おら、ちゃんと掴まってないと落ちるぞ」

叱りつけながら、もう片方の足も同じように持ちあげる。エリは自分の身体を支えるために吉崎の首に腕を巻

きつけるしかない。御坊の方から見ると、逆ハート型の臀部がズンと下がり、両足がM字に抱えられるなど、とうてい女子校生の耐えがたい格好になっている。

「それで性器が繋がってれば、駅弁スタイルだな」

「いやはやけっこう重いですよ、このお転婆娘は」

「もういいでしょうっ。さっさと下ろして」

凄まじい形相でエリは吉崎を睨みつける。持ちあげられた分、彼女の顔は暴虐者の顔と高さを同じにしていた。

「怖い顔するなって。お前の顔ってのは毛唐みたいだから、ただでさえアクが強いんだ。そこへもってきて目を吊り上げてみる、子供だったら泣きだす形相になるぞ」

「早く下ろしてよっ」

「仕方がないだろう。これも職務のうちさ」と、吉崎は太腿を抱え直すようにして腹のうえに彼女の下腹をいっそう密着させるのだ。

エリは腰をゆさぶり、上体を仰け反らせて、なんとか逃げようとするが、吉崎の力はどうにも強すぎた。女子校生の可憐な女体に滝のように汗が流れ落ちる。むろん、吉崎はエリが暴れてくれるのを望んでいる。そうすればそうするほど、たわわな乳ぶさが胸毛の密集した彼の胸板を官能的に擦るし、股間さえも臍の辺りをサリサリと刺激してくるのだった。腹にまではみ出している剛

毛と霞のような恥毛とが混ざりあい、絡みあいしている。チクチクと、それはエリの性器にまで突き刺さっているのだ。

吉崎はたまらずいかつい己れの顔を突きだして、エリの柔らかそうなスベスベの頬に頬ずりしようとした。いやいやとエリは右に左に顔を振りたくり、その接近から逃れようとする。汗にずっしりと根元まで濡れそぼった黒髪が心地よく吉崎の鼻面を打ちつける。

「おら、動くと正確な測定が出来ないじゃないかよ。いつまでもこうしていたいのか、ん？」

とうとう吉崎の頬が逃げ惑うエリの頬に重ね合わされた。絶望的な呻きを洩らすエリ。吉崎の不精髭がゾリゾリと感じられ、鳥肌が総身に浮き上がった。

「いいなあ、十八歳の肌は！」

重ねるだけでは飽き足らず、自分の頬を上下に動かして、たっぷり柔肌を堪能する。

弛緩した顔つきの吉崎が突如、イチチと悲鳴を發した。エリが彼の肩口に真珠のような小粒の齒並びで懸命に噛みついたのだ。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

姉さんはオカメ美人

暗視スコープを通してモニターに映る田野倉マリの姿は颯爽として若々しかった。洗い晒しのジーンズに締まったヒップが決まっている。跳ねるように闊歩すると、腰まで届くストレートの長い黒髪は半袖の白いブラウスになびき、横顔を隠した。

彼女は大学構内の駐車場に停まっている灰色のワンボックスカーには気付かず、そのままキャンパスを横切り、アーク灯に青白く照らされた教授棟の入り口から中へは行っていった。

「ね？ 言ったとおりに来たでしょう」

モニター画面を覗いていた御坊は傍らに慚然として腕組みしている木村の肩を叩いた。木村は迷彩服に包んだ肥満した身体を貧乏ゆすりして無言のままである。

「まだわからんさ。田野倉マリが鶉聡子の部屋に行くとは限らんからな」

「またまたあ、そんなこと言っちゃって。ご覧なさいよ。教授棟の窓を——」

御坊は車の窓のカーテンをほんの少しずらした。そこには十階建ての近代的なビルがそびえている。夜の静寂に包まれたK大の教授棟にはチラチラと窓灯がともっていた。

「もう調べはついているんですよ。今日、この時間まで残っている教員でコマンドとつながりのありそうな人間は、経済学部の助教授、鵜聡子一人だけなんです。ヒヒヒ、そりゃ女子教育課風情に手柄を取られては第四課の面目丸潰れでしょうが、事実は事実として受けとめてもらわなくちゃね。木村課長」

御坊はアンコ型の体格をしている木村の丸い肩をさらに叩いた。

「わかったよ」と、木村はとうとう兜を脱いだ。「女子教育課の情報は正確だった、これでいんだろ、御坊次長」

苦々しく吐き捨てた木村だ。皮肉たっぷりの御坊の顔など見るのもいやだと、振り返りもしない。コマンドーの重要メンバーの一人と注目していた田野倉マリが反海猫派の文化人、鵜聡子助教授とつながりがあると女子教育課から報告を受けたときは一笑にふした第四課課長である。治安局の最前線でコマンドー狩りを受け持つエリート集団が、よりによって局内部では閑職と陰口を叩かれている女子教育課如きに指図されるいわれはない。むろん、マスコミ等で歯に衣着せぬ海猫批判を繰り広げている美貌の大学助教授に、第四課が監視の目を光らせていないはずはなかったのだが、部下からはそういった報告を受けていなかった。分析では、武装闘争を公言する非合法組織とは一線を画しているというのが、一般的な

見方であったのだ。何しろ彼女はその抜群の知名度と明晰な頭脳によって、次回の選挙に出馬を噂されている大物でもある。まさかキナ臭いコマンドーと安易に連携するとは思ってもいない展開だった。

(ようするにタカをくくりすぎていたんだな、我々は)

木村は自嘲気味に己れの失態を認めた。担当の部下を左遷して少しでも責任を回避しなければならない。局内の出世競争はシビアなのだ。

「これはえらい事態ですよ」と御坊はニタつきながら囁いた。「鶉聡子の人気とコマンドーの組織力が結びつければ、広範な大衆運動へ発展する可能性だって否定できないでしょう。もし我々が見過ごしていたら海猫は大変なことになっていたかもしれない。もし第四課の失笑にめげて、鶉の監視強化の訴えを取り下げていたらと思うと、ぞっとしますな。むろんこれは狭い『課益』に立脚した行動でなかったのは言うまでもないところですがねえ」

「……まったく今回の一件は女子教育課さん様さまですよ。女の尻ばかり追い回しているのも、役に立つときがあるんだね」

言われてばかりではたまったものではない。むっとしている御坊を押し退けるように木村は立ち上がった。そして、ヘッドフォンをつけて、無線機の前に座っている

局員からマイクを奪いとった。

「海猫 a、海猫 a、雀はどの巣に入ったか？ どうぞ——」

ノイズが聴こえ、即座に報告が戻ってくる。すでに教授棟の各所には捕獲班が配置されていた。

「……こちら海猫 a、こちら海猫 a、雀は自分の巣に戻った。雀は自分の巣に戻った。以上——」

「決まりですな。踏みこみますか？」と御坊。

自分の巣の意味するところは、七階にある鶺鴒子の研究室である。

「ま、今回の女子教育課の奮闘ぶりは称賛に値するとしても、これからは第四課の職務範囲ですからな。ご意見は無用ですよ」

木村は二重あごにたまった汗をハンカチで拭いた。部下が二三人寄ってきて、この豚男に装備を装着しはじめた。まるで関取の世話をする付け人だ。ガンホルダー、防弾チョッキ、サンバイザーつきのヘルメット……。たかが女二人の捕り物に大仰な話である。御坊は内心侮蔑しながら語りかける。

「まあ、聡子のほうはいいとしても、マリは我々が捕獲している田野倉エリの姉でもあり、捜査の重要人物ですからねえ。おいそれと見過ごすわけにはいきませんぞ。うちの敏腕部員を同行させて戴きましょう」

「敏腕部員ってのは、あいつのことか？」

苦笑しながら木村はその二重あごをしゃくった。振り返ると、その先には完全武装した吉崎が仁王立ちしている。第四課の行動部隊など、まったくかなわないほどの重装備。二十年前のアーノルド・シュワルツネガーだってここまで臭くはあるまいといった出で立ち。裸の上半身に弾丸を縫いつけたベルトをたすきがけにし、ショットガンを刀のように背負い、手には小型のバズーカ砲を持っている。手榴弾をいくつもぶらさげたベルトをしているかと思えば、何を血迷ったか、頭には『必勝』と赤く染め上げた鉢巻きを巻いているのだ。

「……吉崎、あのなあ……」

御坊が髪を掻き毟っているのを無視して、吉崎は木村の前に進みでる。

「ご一緒させて戴きます」固い決意に滲んだ形相で請願した。

「かまわんがねえ。兄さん、そのバズーカでいったい何を撃つつもりだね。まさか今夜の満月を撃ち落とすつもりじゃなかるうな」乾いた笑いが車内に響いた。

「僕はこの日のために海猫に入ったようなもんですよ。嬉しいなあ、まったく」

吉崎はまわりの視線を気にとめた風もなく手にした武器を撫でまわしている。

「大変だよなあ、御坊さんも。敏腕部員に愛想つかされちゃって。女子教育課より第四課のほうがいいんだと

さ」と真っ赤になっている御坊の肩を叩く木村。

「……吉崎、お前、後で話があるからな……」

「先輩、それでは行ってまいります。決して女子教育課の名を汚すようなヘマはしませんから」

吉崎は御坊に敬礼した。

「ま、後にくっついてこい。足手纏いなるな」

木村はそういって、車の扉を開け、肥満に似合わぬ身軽さで飛び降りた。つづいて数人の局員たち。最後に吉崎だ。

黒い影は小走りに教授棟の入り口まで行き、中の様子を窺う。フロアへ入ると、グループは二手にわかれ、一方はエレベーター、一方は非常階段で七階をめざす。吉崎は木村とともにエレベーターに乗った。途中、伏兵として張りこませていた私服の部下が加わり、様子を報告する。

「そうとう用心深いですね、この二人。田野倉マリが入ってもう十五分になりますが、日常会話しかしません」

鴉聡子の研究室内には盗聴器が仕掛けられていた。

「いよいよ怪しいじゃないか。暗号を使っているのかもしれない」

もしそうだとすると、鴉聡子はかなり深くコマンドーとかかわり合っている可能性がでてくる。コマンドーどもの暗号を知っている人間は少ないのだ。

小型ラジオのような受信機から二人の会話が流れてくる。

『ほんと、愛ちゃんて可愛らしいわね』これは田野倉マリの声。

『うふふ。高齢出産するとね。目に入れても痛くないものよ』

俊英美人博士の声はややハスキー。聡子は三十六歳だが、二カ月前、長女を出産したばかりである。彼女たちは延々、愛と名付けられたその赤ん坊のことばかり話しているらしい。

「え、じゃ部屋にその赤ん坊がいるんですか？」と吉崎が訊ねた。

「フフフ、子連れ出勤など珍しくないわ。このご時勢だからな」木村が答える。

報告者がニヤリと笑った。「さっきまでビービー泣いてましたがね。聡子がお乳を与えたので、おとなしくなりました。聴こえませんか？ チュウチュウおっぱいを吸う音が」

エレベーター内部がざわつく。数人の武装局員たちが一斉に小型受信機に群がり、耳をそばだてる。なるほど、小さいが力強い吸引の響きが伝わってくるではないか。生まれ出でたばかりの生命力の鼓動とも言える。

「夏蜜柑みたいにパンパンに膨らんでいますからね。聡子のおっぱい。きっと溺れるくらい大量にミルクが出

ているんでしょう」

「まさか本当に見たわけではないでしょう？ 鴛鴦子の乳ぶさを」

吉崎は悲鳴に近い声になっている。

「まさか。今夜は薄いブラウス一枚だったんで余計目立ったんですよ。もともと豊満でしたけど、妊娠出産で倍くらいに……。ヒヒヒ、たまりませんよ」

「お前たちは職務を忘れとる」

女子教育課の助平男に感染したのか、部下たちが猥褻な色になりつつあるのを、木村課長は一喝した。エレベーターはシーンと静まりかえり、二人の女性の和やかな会話だけが流れた。

『こんな可愛い赤ちゃん、放っておいて、よく男の人はアフリカなんぞに行けちゃいますね』

『ああ、あの人は街のなかに一月といられない人だから。森が似合っているのよ』

『またローランドゴリラのフィールドワークですか？』

『そう。ねえ、マリちゃん、知ってる？ ゴリラには同姓愛があるのよ。うちの旦那が雄ゴリラに誘惑されないかと、それが心配よ』

『先生、それ、ひどい！』

軽やかな笑い声が重なりあった。鴛鴦子の夫、喬寛は同じ大学で生物学を研究している。机上で理論を組み立

てるより、足で歩いて目でたしかめるタイプの研究者らしく、頻繁に海外へ行っている。今回も聡子の出産を見届けると、すぐさまアフリカへ出発したのだ。聡子は学内ではゴリラ・ウイドウと呼ばれて久しいが、もう慣れっこになっていて、とくに気にしている様子もない。インテリの夫婦だからではなく、深い信頼で結びついているのだろう。

赤ん坊がまた激しく泣きだした。母親が会話に熱中して授乳を中断したのだ。

『食欲だけは父親譲りなんだから』

『フフ。あんなに大きくなったら、今度は愛ちゃんが牝ゴリラに誘惑されてちまいまちゅねえ』

『まあ、マリちゃんも言うじゃないの』

今度の笑い声はすぐに途切れた。二人の女はきっと懸命に母親のおっぱいを吸っている赤ん坊の姿に見惚れているのだろう。

「遅いな、このエレベーターは」

誰かが呟いた。エレベーター内部の男たちの思いはひとつである。早く研究室になだれこんで、あらわな乳をこの目にしたい。たぐいまれなる美女、鶉聡子の宝珠の如き、白い乳ぶさを拝みたい……。

やっと七階について、扉が左右に割れると、男たちは我先にとフロアに飛び出していった。その先頭がなんと吉崎だ。

「てめえ、後についてこいと言っただろうが！」追い掛けながら木村が怒る。

「こんな時に課のメンツなんて、持ちこまんでください！」

一向に気にするでもなく吉崎は一番乗りで『鴉研究室』のドアを蹴破っていた。

「動くな！」空気を震わせる怒号が室内に轟いた。窓際にデスクがあり、その前の簡単な応接セットに二人の女が目を点にしてこちらを見ている。一人はソファに座り赤ん坊をはだけた胸に抱いている。もう一人は突っ立って、その女の傍らにいた。

「そのまま、身動きひとつするんじゃないっ。容赦なくぶっ放すぞ！」

吉崎はバズーカ砲を二人に向けたながら部屋にずかずかと入りこんでいく。

つづいて、遅れた本隊がどっと駆けこんできた。

彼らの迷彩服と異形な武装姿に言葉を失っていた二人だが、ようやく事態が呑みこめたようだ。驚きの表情から嫌悪と憎悪が入り混じった不遜な顔つきへと変わった。

「あなたたち、どうつもり？　ここは大学の構内よ。これは学問の自由を犯す行為だわ」

赤ん坊を乳ぶさに吸い付かせたままのショートヘアの女が落ち着いた声で言った。

しかし吉崎を押し退けるように前に進みでてきた木村は、彼女の言葉には耳を貸さず、立ち尽くして激しい気性もあらわなロングヘアの若い娘を睨みつける。

「田野倉マリだな。先日の爆弾テロの件につき、お前に訊くことがある。局まで同行してもらおう」

重々しい木村の態度に、田野倉マリはちっともビビることなく、うっすらと笑みさえ浮かべ、「あなたたちは何者？　まず名乗るのが先じゃありませんか？」と、リンとした声で言った。

（こいつがあのエリの姉さんか……）吉崎はある感慨をこめてその娘の顔と身体を観察した。先日、女子教育課の淫靡な弾圧を受け、最後には吉崎に姦された女子校生の姉は、妹とはタイプの違った美人と言えるだろう。妹がハーフのような野性的な顔立ちであるのに対して、姉の貌はしもぶくれの輪郭で、どちらかといえば日本的、白ムチ、の感じなのだ。目は切れ長で眉は細く、口は小さめである。ただ、抜けるような肌の白さと、つんと上向きの鼻の形だけは妹とそっくりであった。身長は同じくらいだが、プロポーションは妹のほうが豊満かもしれない。

（そうそう、こいつはAカップだったっけ）アパートの部屋の箆笥を物色した際、出てきた二種類のブラジャーのうち、吉崎の手で執拗に揉みたくられた妹エリの乳ぶさはまるやかなBカップであり、この女子大生の姉が

小さめのサイズの持ち主だったのだ。白い、半袖のブラウスに包まれた上半身の肉付きはなるほどほっそりとしているようだった。ジーンズをぴっちり履いた下半身もスレンダーな魅力といえる。

田野倉マリはそのブラウスの清楚な胸に垂れ落ちていた黒々としたストレートロングの頭髪を、さっと背中へ払い除け、ほっそりとした透き通るような白い腕を組んで、乱入者たちを睨みつけている。

（ヒヒヒ、タイプは違うが、ジャジャ馬ぶりは同じのようだぜ）

頭の真ん中から分けた髪が縁取っている、その卵形の顔に宿った火のような意志の激しさが、エリの時と同じように吉崎の高揚を誘うのである。

「身分を証せない理由でもおありですか？」

マリは海猫の行動隊長を前に一步も引かぬ毅然とした対応をしている。

「それは局へ行ってからの話だ。つべこべ言わずに神妙にお縄につくんだ」

木村はなおも前へ進んでマリの顔に銃口を突き付けた。

「やめてください」落ち着いた声でそう言ったのは、座っていた女、鶉聡子である。「ここは私の部屋です。ここに入るなら私の許可を取るべきでしょう。それをしないと不法侵入にあたりますわよ」

「そうなんですよ、鴫先生——」 マリに銃口を向けたまま、木村は聡子のほうを向いた。「それが問題なのです。ここがあなたの部屋である事実が。優秀な大学の経済学部の助教授であり、また、テレビでもご活躍中で世間の信用の厚い鴫聡子先生の部屋に、なにゆえ、コマンドーの危険分子がたむろしているのか。これは重大な問題でありますぞ。先生にもご同行願わねばなりませんまいなあ」

「で、捜索令状はあるのですか？」

問題をすり替えようとしている木村の態度に微笑みながら聡子は問い正していく。

（こいつはとんだ牝狸だぜ）と吉崎は聡子の落ち着き払った態度に内心舌を巻いた。なにしろ彼女の乳ぶさは剥き出しで、赤ん坊を吸い付かせたままなのである。十数人の男たち——階段から上がってきていた一群も合流していたので狭い部屋はごったがえす状態になっている——の視線はその薄桃色のブラウスを肌け、ベージュのブラジャーを上げて、重たげにこぼれ出ているたわわな片乳房（にゅうぼう）に集中しているというのに、彼女は一向に恥じ入った態度を見せず堂々としているのだ。ふかふかのタオルに包まれた小さな彼女の娘の口が、乳頭部を窪ませるほど力強く押しつけられ、チュウチュウと吸うのを妨げようとしないのである。これが母親の強さなのか。その長女の口に収まりきらないほど肥大した

アズキ色の乳輪には迫力さえ感じてしまう。

吉崎は、この新進気鋭といわれる女経済学者の顔を改めて見つめた。

化粧はほとんどしていない。しかしマリほどではないにしる、張りのある肌をしている。いや、マリにはない大人の女のしっとりとした艶が感じられる美肌だ。黒髪は若い母親風にショートにまとめられている。ショートといってもうなじが露出するほどではなく、量は豊富で、額を眉まで覆っている。知的な目鼻立ち。瞳はぱっちりとして、鼻筋がすっと通り、唇は肉感的だ。なるほどテレビその他のマスコミで持てはやされる知的センス抜群の美貌といえた。

(これで三十六歳か。とてもそうは思えんな) 吉崎は感心したが、たぶん出産したばかりの女は美しく輝くものなのだろう。精神的肉体的にピーンと張りつめるのだ。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####。

宝乳捕縛

「どうした、マリ。もうレジスタンスは終わりか？
鴉先生に何か言っておくことはないのか。口の蓋を閉めれば喋れもしなくなるんだぞ」

木村は全頭マスクの耳の部分に口をつけるようにして大声で言った。そうしないと聴こえないのだ。

「……せ、先生……」 マリが発したのはそれだけであった。

「マリさんっ、マリさんっ」

聡子の叫びはほとんどマリの耳には届かなかったろう。

木村は口の蓋を閉じにかかると同時に、その蓋の裏側、つまり彼女の口にあたる方向へ向って、硬質ゴムでできた長い突起が付いていた。これはマスク使用者の言葉を完全に封じるための仕掛けで、口中に差しこまれると舌が押しさえこまれ、ちょうど猿轡と同じ状態になるのだ。木村は慣れた手つきで、それをマリの開け放たれた口へ挿入し、蓋とマスクをチャックで縫合するように閉じてしまう。

ついに全頭マスクが完成し、マリはほぼ三重苦の世界に封じこめられた。黒髪だけが頭部から露出している。

漆黒のマスクをかぶせられた彼女はがっくりと首をうなだれさせる。それ自体、かなりの重量なのだが、肉体的なダメージはまだ後からジワジワと出てくるはずで、今は精神的なショックに打ち拉がれているといってい

い。

「どうだ、恐れ入っただろう」

木村はざまあみるとばかり、頭を小突いた。それが引き金になったように、マリはやみくもに足を蹴りあげはじめた。

「お、こいつ、まだ諦めきれんのか」

木村は驚いた。全頭マスクを装着すると、ほとんどはそれっきりおとなしくなるものなのだ。なんら効果のない抵抗ではあるが、見上げた根性といわねばなるまい。

木村は銃把で彼女の膝を容赦なく打ちつけて鎮圧すると同時に、上半身を裸にしると命じた。

「馬鹿な真似はやめて！」聡子の悲鳴は男たちの歓声に掻き消される。

四方から伸びてきた手がブラウスにかかり、一気に引き裂いた。それで男たちの意図を悟ったのか、マリも身藻掻いたが、後手錠のうえに多勢に無勢だ。ボタンが弾け飛び、ビリビリと薄布が破れていく。ほっそりとした上半身が露呈した。ブラジャーひとつきりのまばゆい裸身である。

（やっば、妹のほうが豊満だな）純白のブラジャーに包まれた胸を睨みながら吉崎は思った。

そのブラジャーも筆り取られた。嘲笑が沸き起こる。

「とんだペチャパイだぜ！」

男たちは指を差しながら口々にマリの胸乳の薄さを嘲

るのだ。

うっすらと盛り上がっているそれは中央にピンク色——これも妹と同じ——の乳首を屹立させている。乳飲み子を抱えた聡子の乳ぶさが焼き付いた目にはいっそう小さく映るのだろう。ひょっとすると、まだ処女かもしれない……と吉崎は目を細める。だとしたら、二十一歳にして、このふくらみきっていないバストの説明もつく。コマンドーの運動にかまけて時機を逸しているのだろうか。しかし吉崎はこういう可憐な身体つきも嫌いではない。みる、あの美しい光沢をもった黒髪が、手錠をされているため、セクシーに肩甲骨が浮きだしている陶器のような白い背へ垂れかかる色香ときたら、スレンダーの女独特のものといっている。上半身真っ裸にジーンズ。これも悪くない。

(俺だったら全頭マスクなんてん不粋なものはかぶせないがな)

それがなくて、口惜しそうな表情を同時に拝めたら、きっともっと楽しめるはずなのだ。しかしマスクは木村の嗜好なのだろう。仕方がない。

マリは外気が直接肌に触れるのを感じて、上半身をヌードにされたのを知ったに違いない。とうとう抵抗をやめ、うなだれた。胸もとが朱に染まっている。

「ふん、余計な手間をとらせおって。もっとまともなおっぱいを見せろと言うんだ」

木村は憎々しげに吐き捨て、大きな拳をマリの鳩尾へ叩きこんだ。備えのない下腹部への強烈な打撃に女子大生は身体をふたつ折りにして崩れ落ちた。

「——さて、と」

拳を撫でながら木村はゆっくりと聡子へ振り向いた。聡子はまだ片乳房を隠していなかった。あまりの急転直下の事態に羞恥も忘れていたのだろう。大きな乳輪のいっそう色ずんだ乳首から白いミルクが一滴、したたっている。青々とした静脈が走った宝珠のような白い乳ぶさが烟るように輝いていた。

「おや、こちらはサービス精神旺盛ですな。しかし見ているほうが恥ずかしくなるような見事なボインだ」

木村が指摘すると、聡子は憤然とブラジャーの紐を肩に戻した。ブラウスのボタンを一つひとつ留めていく。

「マリさんのマスクを外してください。そして愛を、娘を返してください」と、聡子は怒りを呑みこむようにして言った。

「ほう、やはり赤ちゃんに吸ってもらわないと、苦しいですか。たっぷりミルクを孕んでいるようですものねえ」

木村は淫靡な視線をまだブラウスの胸へと注いでいる。

「それはどうでもいいのです。搜索の結果、何かでてきましたの？」

女助教授は皮肉な視線を家捜しの面々へ向ける。彼らはボールペンまで分解する執拗さをみせて鋭意捜査中である。

「赤ちゃんだってお腹いっぱいになれば吸わなくなる。それでもお乳が張るときはどうするんですか。自分で絞る。それとも旦那さんに吸い出してもらおう……」

聡子は表情ひとつ変えずに木村を睨みつけたままだ。

「そういう場合でも、やはり感じるんでしょうなあ。何ととっても性感帯だし、妊娠中から永らくご無沙汰していたわけで、身体は飢え切っている。女盛りの年齢だから、たまらんでしょう。ひょっとして今もスカートの下のパンティはぐっしょり濡れて、ワカメの毛が透けて見えるんじゃないかな」

木村の視線が胸からオフホワイトのスカートから色っぽくでていく膝小僧の辺りへと這いおりる。まったく、スカートに包まれた腰部のまるみを帯びた肉付きも垂涎の的であった。

「おっしゃる通り——」と、聡子は木村の下卑たからかいや視線に、ちっとも動ずる風もなく、無表情でつぶけた。「わたくしは乙女ではありませんから、挑発に乗るような面白みはございません」

聡子は立ち上がった。局員たちの制止があるうと、聞く気は毛頭ないのだ、そう表情は語っている。

「娘が泣いていますので」彼女は毅然として研究室の

入り口に向かって歩いていく。

母親の強さというべきあまりの堂々とした態度と、女としての輝くような美しさに、さしもの海猫たちも立ちあぐさるどころか、声もかけられないでいる。

しかし、聡子が扉に手をかける前に、それは激しく外側から開かれた。

「課長っ、こんなものが！」

赤ん坊と共に廊下へ出ていた女性局員が慌てふためいて駆けこんできた。彼女は右手に泣き喚いている赤ん坊を抱き、左手にひらひらと小さな紙片をかかげている。

「どうしたんだ？」と木村。

聡子の顔色が青ざめる。

「こんなものが赤ん坊の肌着のなかに——」

あまり泣くのでおむつでも濡れているのかと思い、広げてみたところそれが発見されたと報告する。

「なんだって」木村は奪いとった紙面に目を走らせる。その目がにわかに光を帯びてきた。「これは乱数表だな。コマンドーが連絡用にもちいる暗号だ！」

なるほどそこにはびっしりと円周率のように数字が並んでいた。

「道理で赤ちゃんを気にすると思いましたよ」

木村は乱数表を胸のポケットにしまい、立ち尽くしている聡子を見やった。

「やはり、こいつは連絡員だったんだな」

吉崎はまだ尻餅をついている全頭マスクの田野倉マリの腰を蹴り上げた。

「こうなったからには、あなたにもご同行願わねばなりませんぞ」木村は喝采を叫びたいほどの昂奮を身内に隠しつつ、上官の威厳を持って言明した。「鴝聡子に手錠を――」

家捜しの手を休めて成り行きを見守っていた局員たちは、俺が引導を渡すのだとばかりに彼女に突進する。

「待って！」と、聡子が制した。

「何ですか、先生。この期に及んでまだ言い逃れですか。あんまりてこずらせると、この娘のようになりますよ」木村の拳がマリの側頭部を打ちつける。

「違います……」低くはあるけれども、うろたえなど見せずに聡子は言った。彼女は女性局員の腕から一粒だねの愛を抱き取った。「最後にこの子にお乳をあげさせてください。二三分でけっこうですから」

「ふむ、まあ、かまわんでしょう。長くなるかもしれませんが。これだけ明白な事実がある以上、一晩で放免というわけにはいかない。乳飲み子を抱えた母親としては断腸の思いでしょう。吸わせておやんなさい」

木村は局員から手錠を受け取ると、聡子の背後にまわり、素早く彼女の両手を背に交差させ、手首にそれを掛けた。

「……今、許可するといったばかりじゃないですか。

どういう意味です？」

振り返り、木村を睨みつける。

「甘えてもらっては困りますな。あなたの身柄はすでに海猫の管轄下に入っているのです。もはやあなたの身体はあなたの自由にはならないのです。授乳も、我々の手で行ないます」

「……」

「さあ、そこへお座りなさい」

口惜しそうな表情になっている女助教授の肩を押して、リノリウムの床に跪かせた。木村はヘルメットを脱ぎ、彼女の正面に屈んだ。そして、ブラウスのボタンに指をかける。聡子の美貌を覗きながら外していく。

「こうして間近で見ると、さすがに歳は隠せませんな。目尻には烏の足跡があるし、小鼻の脇の荒れも目立ってきている。やはりどんな美女でも三十をすぎればノーメイクはさすがに無理がある」

中傷を浴びせながら、木村はボタンを外し終える。白い胸もとが噴辱に赫らんでいるのが見えた。フルカップのブラジャーにすっぽりとしまわれている大ぶりの乳房が深い谷間をつくっていた。

木村は憚然としている聡子をニタニタ嘲笑しながら、ブラウスを肩から二の腕に落とした。むっちりとした丸い肩から小さめの臍窩の下腹部までの、見事な女体が露呈した。烟るような柔肌の輝きが網膜に滲んでく

る。この豊満な官能美にあふれた肉体が、伶俐な才智を称賛されるインテリ女の持ち物だとは、神も粋な計らいをしてくれるものである。

見るからにミルクがたんまりと詰まっているような、たわわな双乳が勢いよく張りだしている。これほど巨きくなった乳ぶさなのに、垂れが最小限なのはよほど胸の筋肉が強い女なのだろう。まさに才色、肉体兼備のマドンナといえる。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

ニップルバンド

「どうだ、気持ちいいだろう」張った乳房を揉みこむように拭かれている女助教授を小気味良さそうに眺めながら、木村はフーッと煙を吹きだした。「温かい蒸しタオルは母乳にはいいらしいな。まあ、お前のそのおっぱいなら足りなくなる心配はないだろうが」

すっかり清められた双乳は薄い乳肌を透かして静脈がよく見えるほどである。さらに桃色に火照って、烟るような上半身の白肌にまるでとってつけたような突出感が

あり、えも言われぬエロチシズムだった。

ノックもせずに扉が開けられた。恰幅のいい男が入ってきた。彼もまた迷彩服を着ている。頭には黒のベレー帽だ。襟の金バッジが一際大きい気がする。

「よう。木村」と男は木村に握手を求めた。木村は直立不動の姿勢で恭しく差し出された手を握った。

「よくやったぞ。今回の獲物は表彰ものだな」

「や、局長にそう言って戴けると恐縮します。自分はただ職務を全うしただけでありまして——」

「うんうん、いいぞ。堅苦しい挨拶はそれくらいにしとけ。それよりお前、また太ったんじゃないか」

局長——野辺地大洋は木村に向きつつ、聡子のほうへ歩み寄ってくる。

「三人目が産まれたって？ 男か女か」

「ええ、ようやく男が出てきました」

「それは良かった。だがそろそろ打ち止めにしとけよ。奥さんを大事にしなくちゃな、ん？」

「へへへ、局長にはかなわないナー」

聡子が無視して談笑がつづけられたが、突如、野辺地は聡子の黒髪を狂暴にわし掴んだ。

「痛ッ——」

聡子の悲鳴もいとわず、野辺地は恐ろしいほどの腕力で顔を上向かせる。そして、青筋をたてて憤怒の表情をしている彼女の顔を覗きこんだ。

「ふむ、なるほどなかなか、めんこい顔をしてるわい」と野辺地は言った。

カッと顔から火の出るように、聡子の顔は紅潮しているが、その赤みが首筋から首の付け根辺りにまで流れ、脂汗が光りだしている。

「私はテレビは嫌いだが、お前が出演した番組はほとんどチェックしている。何本かはビデオに撮って繰り返し見ている。ブラウン管で見るより、実物のほうが女っぷりがいいんで安心したぞ」

「……」聡子は頭髪をグラグラと揺さ振られながら、この男が何を言おうとしているのか、判じかねた目つきだ。

「とくにあれが良かったな。妊娠八カ月で出演した討論番組。XX党の代議士をコテンコテンにへこましたときのあれだ。可愛らしいマタニティドレスと、お堅い演説のアンバランスが良かった。なあ、木村？」

聡子の顔から目を離さないまま木村に同意を求める。

「は？ はあ……」訝しげな顔の木村。

「私がどうしてお前のテレビをよく見るかわかるか。ん？」

野辺地はいっそう力をこめて髪をしごき、彼女のあごの両脇を人差し指でなぞった。

「それはな——」野辺地はニッと犬歯を剥き出してニタついた。「お前の顔を見ながらセンサーリをして、オ

××××の先から×××汁をドピュッと吐き出すためだぞ、
わかったか？」

詮議室に野辺地大洋の異様な笑い声が響きわたった。
狂人のものかと思われるような高笑いに、聡子ばかりで
はなく木村や若手局員も呆気にとられている。

(局長、入れこんでんだなあ) 木村は寒気を覚えなが
らそう思った。野辺地の奇矯は今に始まったことではな
いが、とくに絶世の美女を前にすると、テンションがあ
がってくる。鴉聡子はまさに彼の嗜虐心を興奮させてや
まないのだろう。美貌も、行動も刺激的なのだ。

「始めよう、この女のオ×××が見たい」

野辺地は向こう側の椅子に巨体をおろしながら言っ
た。

さっそくテーブルが片付けられた。聡子は彼の眼前に
立たされ、手錠を外された。本能的に乳ぶさを隠すよう
に両手を胸前に持ってきて、紫色に鬱血した手首を擦
る。瞳は、貧乏ゆすりをしながらこちらを凝視している
野辺地を睨みつけている。が、聡子はジタバタするつも
りはなかった。ここまできて暴れたところでどうなるも
のでもない。拒否しても腕づくで従わされるだけだ。そ
れは体力の浪費以外の何物でもなからう。また、それは
このサディストたちを歓ばせるだけの道化である。もは
や乳ぶさは白日の下に晒されているのだし、出産の時を
思えば裸になるなど、どうということもないはずであ

る。こいつらは人間ではなくケダモノなのだから、羞恥心を覚える必要はない——さすがにインテリらしく機転をきかせた聡子はふてぶてしく野辺地を見なおした。

「ここで脱げばいいのね」

「違う違う」と野辺地は自分の顔の前で手を左右に振った。「『脱げばいいのね』じゃなくて、『脱がさせて戴きます、ムサ苦しい身体ですが鼻を摘みながら我慢してご覧くださいませ』そう言わなければいかん。だろう、木村」

「ウヒヒ、さすがは局長。婦女子の礼儀には厳しいですなあ」木村は太鼓持ちと化している。「おい、女。局長のおっしゃるとおり、そう口上を述べてからスッポンポンになるんだ。いいな」

「……」

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

俺たちやしがない矯正士

因果を含める前田徳蔵の言葉はまだつづいた。

「心も身体もすべて改造する。お前が協力的であれ

ば、それでよし。反抗的であれば、俺たちもお前も何度か汗を掻かなければなるまい。だが、これだけは言っておこう。今まで何十人ものコマンドーを手懸けているが、成功しなかった例は一度もない。皆、最後には恐れ入りましたと俺たちに兜を脱いで矯正されるんだ。いいか。それにお前は女だ。そしてただのほそっこい女子大生ときている。どう足掻こうが頑張り切れるものではないぞ。だから、はなから協力的になれ。それがお前のためでもあるし、税金を無駄使いしないためでもあるんだから。いいな？」

徳さんはマリの頬にかかった黒髪のほつれを掻きあげてやり、鼻のしたの汗や、唇の唾液の残滓を拭き取ってやる。

「なかなか可愛い顔をしているじゃないか。この顔がメチャクチャになるまで殴られたくはないだろう？ だったら、まずここでズボンとパンツを自分で脱いでみせる。このモグラ房では収容者は素っ裸で暮らすのが決まりだからな。もしそれが出来たら、今日は第一日目でもあり、記念として褒美に飯を食わせてやる。なーんだとお前は思うかもしれない。しかしな、ここでは収容者がまともな食事にあるのは、なかなかないことなんだぞ。皆、ドッグフード並みの食事、いや餌で飢えをしのいでいるといった状態なんだ」

「コラ、おんなっ。前田徳蔵といやあ、泣く子も黙る

矯正士の神様と呼ばれるお人だ。その神様が小娘如きに情けをかけてやろうと、仏心をだしていらしてるんだ。黙ってないでなんとか言ったらどーでい！」

徳蔵の因果を受けて、背中に馬乗りになっている男がドやしつける。陶器のように硬質的な彼女の若々しい肩先を殴りつけ、黒髪をわし掴んで激しく揺さ振る。

「……痛いじゃない。上から退いてくれなきゃ脱ごうにも脱げないわ……」

マリは初めて声を発した。醒めた視線を男たちへ向ける。

「なにィィ！」男はカッとなって拳を振りあげたが、徳さんがそれを制した。

「ま、言葉遣いはひどいもんだが、それはおいおい直していくとして、まずは自分でヌードになると言ってるんだから、脱ぎっぷりを拝見しようじゃないか」

徳さんがそう言うのでは、男も振りあげた拳をおろさなければならない。

「ケッ、生意気な顔をしやがって。とっととオ×××見せやがれってんだ」

男と太郎はマリの身体から立ち上がった。

マリは細腕を突っ張って、畳のうえに身体を起こした。まだ頭がクラクラする感じである。それでも顔の赤みはいくらか引いている。もともと細身ながら体力はあるほうだった。マリはあらわな胸乳を隠そうともせず、

よっこらしよと立ち上がった。十数人の男たちの好色な視線が一斉に注がれる。長い黒髪が首筋から胸へと垂れている。背中ではその毛先がジーンズのベルトの辺りまで届いていた。

スレンダーな女子大生の魅力に男たちは生唾の顔をしている。マリは促される前に、ベルトを緩めていった。そしてチャックをじりじりと下げていく。純白のパンティのフロントが露呈してきた。ジーンズをヒップの丸みから太腿へ落とす。可憐な双臀はかたちよく上向きで弛みも垂れもない。パンティの薄生地が今にもはち切れそうであった。

ジーンズを下げてしまうと、マリの指がパンティのゴムにかかった。そこでも躊躇はなかった。彼女にとって海猫の男など人間のうちに入っていないのだろう。犬や猫の前ならちっとも羞恥を感じない理屈である。

ヒップがプルンとあらわになった。そして跨ぐらのヘアも。少なめの黒毛はそれでも逆三角形型に整っていた。

パンティを足から抜き取ると、マリは少しも隠そうとせずに裸身を男たちに見せつけた。胸乳にかかっていた黒髪をわざわざ背中へ跳ねあげもするサービスぶりである。

手足の長い、均整のとれた肢体である。肩先から胸もとにかけての透明感、あるいはこぶりな乳ぶさからキュ

ツとくびれたウエストラインの繊細さ、そしてここだけはムチムチと肉がつき、フランス女のようにブリッとふくらんだ桃尻の弾力感、脚線美の瑞々しさとあいまって、爽やかな色気と活動的な若々しさが満ち溢れているのだ。

「フフフ、顔はオカメだし、胸もペチャだが、スタイルは悪くない。気に入ったぞ。俺がじっくり手塩にかけてやる」

と徳さんは田野倉マリを自ら矯正することを宣言した。それはもちろん例外中の例外であるので、他の矯正士たちは少なからず騒ついた。たしかに美人——『オカメ』は徳さんの洒落っ気である——でプロポーションも悪くないが、この程度の女なら今までだって何人もいたはずだ。それらは部下たちに任せていたのに、なぜ今回は？ 徳さん独特の嗅覚が田野倉マリに何かを嗅ぎつけたのかもしれない。男たちは改めて女子大生の裸像を眺め直した。

「おい、太郎。お前が俺のペアだ。トボケてないでこの前田徳蔵様の矯正の技術、盗まなけりゃいかんぞ」

「へ？」太郎は驚いたように徳さんを見た。

最年少でまだ見習いに毛の生えた程度の太郎を、この機会に修業させてやろうという徳さんの親心である。太郎は相好を崩してしきりに礼を述べている。

「んなことはどーでもいい。さっさと食事を運んでき

てやんな」

徳さんが苦笑しながら命じると、太郎は部屋を飛びだしていく。数分後、彼は定食ののったお膳を抱えて戻ってきた。――

マリは畳に正座し、膝前に置かれたお膳からプラスチックの食器を手にとって、箸を動かしていた。

全裸の若い娘が定食を食べているのを、ムクつけき大男たちが取り囲んでじっと観賞している不思議な光景である。それより驚くべきなのは、そのような状態であるのに、マリは旺盛な食欲を見せている事実であろう。胸も陰毛も晒したままなのに、あるいはまた外部との接触を一切絶たれた海猫の中枢に拉致され、監禁され、これからどんな目にあうのか、考えるのもおぞましい状況に置かれているのに、その食べっぷりは見事というほかはないのだ。飯のお代わりまで要求する太さである。ひよっとするとそんな気風のよさが徳さんの惚れこんだ理由であるのかもしれない。

「へへ、乳首を梅干しと間違えて箸で摘んじゃ駄目だぞ。どう見てもおっぱいの先っぽには見えないからな」

「味噌汁の具はワカメか。ちょうどいいじゃねえか。もっと濃くなるようにたーんと食いな」

「俺、好きだなあ。揃えた踵の上にお尻がちょこんと乗ってるっての。踵がピンク色しててさ。真っ白な尻の肉に食いこむあの感じ、顔はブスでもそそられるんだな

あ」

マリを取り囲みながら口々に品性下劣な言葉を浴びせている矯正士たち。しかしマリはいっこうに反応を返さずに、黙々と咀嚼活動に集中している。

彼女の横で、彼女の担当になった徳さんと太郎が、そのロングヘアを束ねはじめていた。もともとセンターパートの黒髪を、さらに後ろ髪さえ両サイドへ二分し、片手で握り締める。マリも、ん？ と徳さんを見た。

「いいから食ってな。ここでは女性収容者はみんな三つ網のお下げ髪にする決まりになっているんだ。そのほうが従順で可愛い女に見えるだろ」

徳さんの説明にマリは思わずぷっと噴き出した。

「髪は女の命だからな。これを変えることによって気分を一新するんだよ」

まさに吹飯物の屁理屈だ。マリは一言、からかってやりたい衝動を必死に押さえた。それでも口元には嘲笑が浮かんでしまう。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####。

乳蒸らし

それだけでも乳ぶさは痛々しくくびれているのに、まだ縄尻に余裕があるのを利用して、野辺地は手首から首を挟むように縦に胸縄まで下ろし、胸の谷間から隔てるように縛りつけた。これにより、鶺鴒子の宝珠の如き巨乳は、くっきりと、ぷっくりと、突き出す格好となった。

「どうだ、高手小手縛りされた気分は？」

野辺地は背中を丸めて苦悶に喘いでいる女性経済学者を頭髪を掴んで引き起こした。彼女は歯を食い縛った美貌を仰け反らせた。その顔は朱に染まったように真っ赤である。ただでさえ張った乳ぶさを縄で絞りこまれ、破裂せんばかりに膨らまされては声もなかった。ただ、苦悶の脂汗を滴らせるのみである。

「まあ、生まれて初めての緊縛だ。頭がショートするのも無理はないさ。そのうち縄をかけられただけで、従順でおとなしい、女本来の性根が心に沸いてくることになる」

それにしても鶺鴒子の緊縛体は想像どおりに刺激的な眺めであった。優美で、官能的な女体の上半身はキリキリと食いこんでいる縄によって、湯を浴びたようにカーッと桜色に染まりだしている。それは、生汗の光沢に包まれて、甘酸っぱい体臭とともに烟るような輝きを見せているのだ。聡子の、こらえてもこらえきれない、し

かしそれでもこらえようと懸命に食い縛る唇は、やがて半開きになりつつあり、ハアハアと熱い苦しげな悶えを吐き出している。火照った頬を、丸い肩に擦りつける仕草のなんとエロチックな様か。これが田野倉マリであればギャアギャアと騒げるだけ騒ぐのだろう。いや、それも一興であるけれども、やはりSMの極致は緊縛に耐える女の表情こそ真骨頂なのだ。鴛鴦子にはそれがああり、そう発見しただけでもこんな夜中にきた甲斐があったというものである。

「……き、きついわ……緩めて……緩めて頂戴……」

「駄目だ。本来なら足も拘束するところなのに、免除してやってるんだからな。自分の行いを反省するためにもしばらくそのまま耐え忍べ」

野辺地に頭をポンポン叩かれると、鴛鴦子は再びがっくりと背中を丸めるのだ。

「さて、乳搾りといきますか」

徳さんは腕まくりをした。熱い蒸しタオルと湯の張った洗面器が運ばれてくる。そしてどこから見つけだしてきたのか哺乳壺も。

「ま、今日は突然だったからな。こんなところで我慢してもらおう。そのうち自動搾乳器でも用意してやる」と野辺地。

汗ばんだ鴛鴦子の肩を抱いて背後の自分の胸に寄りかからせる態勢を取った。鴛鴦子の体重が何とも言えず小気味

いい。髭面を無理矢理スベスベの頬っぺたに押しつけ、頬ずりしながら両手を回し、乳ぶさを下から掬いあげる。

「……痛ッ……」腫物のようにになっている乳ぶさに手が触れると、さしもの聡子も鼻を鳴らした。ビクンと電気が走ったように身体が脈打ったのが全身で感じられ、野辺地は天にも昇る心境だ。

徳さんは彼女の双乳に貼られたニップルバンドをピッ、ピッと引き剥がしていった。まったくと乳頭に冠している茶ずんだ乳輪が目にも染みる。中央の、爆ぜんばかりに頭を巨きくしている乳首から、すでになにがしかの量のミルクが垂れていた。野辺地が揺さ振るたびに、ゴツゴツした肉粒をためた茶色のそこから白い乳液がこぼれでてくるのである。

徳さんはまず蒸しタオルで器用に乳ぶさを包んだ。

「あっ……あう……」

聡子の顔がさらに赤くなる。火照りに火照った乳房へ、タオルとはいえまだ湯気が立ち昇っている熱さの物が触れれば、疼くような感覚は一挙に増すに違いない。

縄で絞りこまれた乳ぶさはその乳頭部分だけをタオルから露出させて、どこか熱爛をたたえたとっくりのようでもあった。

「ゆっくりと揉んでやってください。私は乳首を刺激しますから」

徳さんは先っぽに哺乳壺のおしゃぶりを取ってあてがった。

野辺地はタオルに包まれた乳ぶさを握り、じんわりと力をこめていく。乳首がたまらず突き出すと、徳さんの人差し指と親指が摘みあげ、コリコリと揉みつぶす。そしてツンツン引っ張りだしては離す行為を繰り返した。

「やめてえ……」聡子は汗をべっとり搔いた顔を振りたくった。発火したような火照りをもつ乳ぶさときたら、男たちの巧みな愛撫にいつそう感応して痺れるような刺戟を脳髄にまで這い昇らせるのだ。男たちが指摘したように、子に吸われることのない乳ぶさは彼女の苦悩といらつきの原因であったが、そのズキズキするほどの痛みと張りが、蒸しタオルに包まれ、真綿で締めあげられるような卑劣な揉みにあって、次第次第にほぐされ柔らかくなっていくのである。それは口惜しくも、甘美な愉悦をともなっていることを聡子は認めないわけにはいかなかった。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

奴隷のマリ

もう良かろうと、矯正士たちはマリの身体から離れた。なるほど、マリは両手で股間を押さえたまま、ほとんど動くことが出来なくなった。不思議な作用である。剃り落とされた陰毛の全質量よりも、このリングのほうがどう見ても軽いはずなのに、今のマリの腰から下はまるで鉛を流しこまれたようにずっしりと重く、気怠いのだった。

「起きろ。そこに正座するんだ」

仁王立ちした徳さんは彼女のお下げ髪を乱暴にわし掴んで引き起こした。

「うう……」マリはそのまま前のめりに突っ伏してしまふ。

「だらしのない奴だ。あれだけデカイ口を叩いておきながら、そのザマはなんだ。もう根性をなくしたのか」オイルを塗ったように脂汗をヌラつかせた華奢な背中を踏みつける。「縄で縛ってやれ」

徳さんの命令に荒縄が運びこまれた。幾人もの女の柔肌を締めつけ、汗と涙を吸い取ってきたような黒光りした縄の束——。それが彼女の細身の裸体に次々と絡みついていった。後手の手首から胸へ、そして細首へと回し掛けされる。二三時間前に徳さんの眼前で緊縛体を晒した鶺鴒子の豊満な白裸とはまた違った魅力がこのスレンダーな女子大生の姿にはあった。二重三重の縄に挟みこ

まれたペチャパイはつぶされた餅のように平べったく扁平になっている。桃色の乳暈と乳首が汗ばみ、紅をさしたように色ずんでいた。聡子よりも肩が張っているため、被虐感は薄れるのだが、それだけ現代的な爽やかな娘を蹂躪している気分は楽しめるだろう。

すっかり縄化粧されると、マリは徳さんの足元に引き据えられた。彼はあどけなく黒髪をセンターパートにした彼女の頭に手をおき、艶やかなその手触りを味わいながら、言った。

「少しは応えただろ。ここではお前が好き放題やってきた世間の常識は通用しないんだ。どんな抵抗も結局は鎮圧されてしまうことを、学ばねばならん。わかるな。掟を破れば、必ずや報いを受けねばならんのだ」

徳さんは彼女のあごに手をかけ上を向かせた。憤怒をギラつかせたマリの瞳はかすかに濡れている。これが屈服の弱々しい涙になるのは何時のことだろう。

「オカメっ、もっと可愛い顔をしやがれ！」

徳さんはマリの頬を平手打ちした。大きく身体を傾け、首を投げ出すようにきつく背けるマリ。縄により、イビリだされた胸乳の乳頭をツンと摘まれると、マリは徳さんの顔に唾を吐きかけた。

徳さんはもう一度、ビンタを食らわし、彼女をその場に転がすと、リモコンを手にした。そして瑞々しい光沢を見せる背中を踏みつけながら、ダイヤルを回した。わ

ずかなメモリの移動であったが、足下の女子大生の絶叫を絞り取るには十分であったようだ。

「オオーッ——」激しく暴れ、徳さんの足を弾き飛ばすと、身体を海老のように折ってのたうちまわる。両手を縛られていなかったら、恥も外聞もなく、性器に指を差しこんでいただろう。彼女のほっそりした裸身は見るみるうちに、新たな汗を噴きだし、玉の雫を浮かせはじめ。

称賛に値するのは、彼女が弱音を吐かないことだった。拷問者に哀願するような言葉を口にせず、ただ強烈なクリトリス・リングの締めつけと闘っている。見上げた根性だ。まったく無駄な抵抗ではあるが。

徳さんはダイヤルを緩めた。彼女の藻掻きは一気におさまった。畳に顔をつけ、肩を激しく喘がせて、荒い呼吸にならずんでいる。

矯正士たちが彼女を邪険に座り直させた。汗びっしょりの美貌。凄まじい怒りに覆われている。小鼻がヒクつき、充血した眼球が剥き出した。

「一言でいいぞ。『私は今日から田野倉オカメです』と、こう言えば赦してやる。簡単だろう。事実なんだからさ」徳さんの言葉に矯正士たちが哄笑した。「さ、答えてみな。お前の名前はなんだ？」

「……私は田野倉マリよ……」

低い声でゆっくりと言った。しかし悲壮な決意が滲ん

でいる。屈服などしてなるものか。しかし……。

徳さんがニヤリと口元を緩め、ダイヤルを回すと、マリはあごの関節が外れんばかりの大口を開けて、喉を震わせねばならなかった。緊縛された身体がブルブルと痙攣し、必死に耐えていた正座の姿勢が、どっと後へもんどりうつ。のびやかな彼女の二肢が膝を腹につけるように折れ曲がる。そのまま、矯正士たちの足元をゴロゴロと転がりだした。

「耐えようとしても無駄だぞ。この苦痛に勝てる女はいない。遅かれ早かれ従うことになる。しかしまあ、お前のことだ。人の忠告に耳を貸す気などないだろう。せいぜい新記録に挑戦してみるんだな」

徳さんは容赦なくダイヤルを『閉』のほうへずらしていく。

しばらく、マリは悶苦の底で足搔きまくったが、とうとう、

「やめてえっ！」と、初めて懇願を発した。

「喋る気になったかな」

徳さんはリングを緩める。すかさず矯正士たちは自分では起き上がれなくなっているマリを正座させ、頭髪を掴んでグイと顔を持ちあげた、蒼白の血の気を失った顔だ。涙が頬を伝っている。

その顔を覗きこみながら徳さんは言った。「難しく考えることじゃない。仲間を売るんじゃないんだからな。

ただ我々がつけた愛すべきニックネームを認めればいいだけじゃないか。餌や糞小便の面倒を見てもらう管理者に、多少、妥協したところで、誰も文句は言わんだろう。誰でもそうしているんだぞ、世のなかってやつは」彼の太い指がマリの鼻の汗を拭う。

「お前の名は？」

「……」マリはしばらく無言であったが、かすかに唇を動かしはじめた。

「聴こえんぞ。ん？　なんだ？」耳を近づける徳蔵。突如、マリは老矯正士の耳にかじりついた。

以下は有料本編でお読みください。

#####